

## 小児の悪性腫瘍疾患に対するTotal Care

### ——心理・社会面についての研究——

(分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究)

鞭 熙、宮本 信也

要約：本研究は、小児悪性腫瘍疾患のtotal careの基礎資料をつくることを目的とした。研究は、患児の家族・遺族に対する意識調査、末期状態の患児の痛みに関する考察、一般小児における死と癌・白血病に関する意識調査からなる。研究結果より、患児・家族への心理的対応に際して、参考になると思われる具体的事項が明らかになった。また一般小児の意識調査結果は、患児に対する疾患説明に際して、参考になるところが大きいと思われた。

見出し語：total care、terminal care、心理的対応、小児悪性腫瘍

#### 1. 患児の家族に関する研究

##### 1) 生存例の家族における意識

対象は、16名の急性白血病患児の母親16名。患児の年齢は4～14歳7か月（平均7歳8か月）、経過年数は7か月～5年9か月（平均2年4か月）であった。調査時点では、全員、完全寛解状態であった。母親の年齢は、30～56歳（平均37歳）であった。

白血病の一般的知識を問う質問では、半分以上答えられた母親は全体の半数であった。母親は、自分の子どもの状態に関係した知識は比較的豊富であった。母親の疾患理解は、自分の子どもの状態を通して、主観的に行わ

れていることが伺われた。患児とその同胞への疾患説明は、ごまかして話していたものが多かった。患児発症後、母親は患児のしつけについて困惑していることが多く認められた。

##### 2) 死亡例の家族における意識

自治医大小児科で死亡した急性白血病10名、神経芽細胞腫4名、悪性リンパ腫2名、肝芽細胞腫1名、胃癌1名の遺族18家族に面接調査を行った。患児の死亡年齢は5か月～14歳11か月（平均4歳7か月）、発症から死亡までの経過年数は2か月～6年4か月（平均1年10か月）であった。

患児の死が近いことをはっきり告げられて

いた親ほど、患児の死の事実を受容でき、また、蘇生処置に対し否定的感情を述べていた。剖検に対する承諾は、18家族中12家族で得られていた。承諾の理由として、医師への感謝やお礼の気持ちをあげたものが多かった。承諾、不承諾に関わらず、剖検に対する返事を患児の死亡前に決めていた家族が10家族いたことが注目された。患児について後悔する点として、病院外の体験・生活の乏しさを訴える親が7家族に認められた。患児の病院外の生活の質的向上を、治療経過中に積極的に考慮する必要があると思われた。医療側への遺族の不満、要望から、患児の末期状態では、患児に対する処置、食事、面会など、あらゆる制限の緩和を考慮すべきと思われた。

## 2. 患児に関する研究

### 1) 白血病患児の痛みの考察

急性白血病末期に激しい痛みを訴えた患児2名について検討した。9歳男児は身体的痛みがモルヒネで抑えられると死を意識した言動が増強した。痛みを激しく訴えることで、死の恐怖を発散させていた可能性が考えられた。長期間個室に一人でいた15歳男児では、痛みの訴えに対して患児の話相手になることが効果があった。痛みの訴えの中に、孤独に対する不安があったことが考えられた。小児においても、末期状態の痛みの訴えの中に、身体的痛み以外の心理的・社会的痛みの訴えが含まれていると思われた。

## 3. 健康小児における意識調査

対象は、宇都宮市内の中学1年から高校3年までの生徒 487名である。

### 1) 死の意識

人間が死ぬ理由として、病気・事故・戦争などをあげたものが67%いた。死を外から暴力的に襲ってくるものとして受け止めていることが伺われた。死後の生れ変わりがあると答えたものは約80%であった。霊の存在を肯定するものも76%にみられた。Templerの死の不安スケールを用いた結果は、死の不安点数は、男子で $7.73 \pm 3.40$ 、女子で $8.51 \pm 3.35$ 、全体で $8.02 \pm 3.40$ であった。

### 2) 癌の意識

癌のイメージは、死のイメージが50~80%、不安・難治のイメージが30%、恐怖のイメージが20~40%であった。死や身体的苦痛のイメージは、中学生の方で高頻度に認められた。癌告知については、積極的肯定を表したものが、成人患者に対しては21%認められたが、小児の患児に対しては12%であった。女子で否定する傾向が強かった。

### 3) 白血病の意識

白血病という病名を知っていたものは、全体の92%であった。中学生で、知らないと答えたものが15%認められた。病名を知った経路は、テレビが50~80%と多かった。白血病の知識としては、血液疾患と言うことはほぼ全員知っていたが、血液の癌と答えたものは約10%であった。白血病は他へ移ると答えたものが5~7%、遺伝すると答えたものが35%みられた。マスコミを通じて、正しい知識を広めることが必要と考えられた。白血病のイメージは、死のイメージが43%、不治・難治のイメージが10%、恐怖のイメージが20~30%であった。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:本研究は、小児悪性腫瘍疾患の total care の基礎資料をつくることを目的とした。研究は、患児の家族・遺族に対する意識調査、末期状態の患児の痛みに関する考察、一般小児における死と癌・白血病に関する意識調査からなる。研究結果より、患児・家族への心理的対応に際して、参考になるとと思われる具体的事項が明らかになった。また一般小児の意識調査結果は、患児に対する疾患説明に際して、参考になるところが大きいと思われた。